

次の**文章A**・**文章B**を読んで、あとの問題に答えなさい。

(＊印の付いている言葉には、文章のあとにへ言葉の説明があります。)

文章A

世界中の人々の世界観は、さまざまなステレオタイプで成り立っている。あなただけじゃない。いまだに日本に対しては、男はみんな眼鏡をしてカメラを首から下げているとか、女の人は日本髪を結って和服を着ていると思いきんでいる人たちが、世界にはおおぜいいる。そんな世界観は間違っているだけじゃなくて、「彼らは自分たちとは違う」という意識を、必要以上に強く人々に与えてしまう。

アフリカの人たちもパソコンを使う。携帯電話だって普通に普及している。もちろん地域や人によって差はある。でもそれは日本も一緒。笑ったり泣いたり愚痴を言ったり、誰かを愛したり裏切ったり裏切られたり、絶望してそしてまた希望を持って親を愛し子供を愛し、そんな人々の営みは世界中一緒。言葉や宗教や民族が違っても、人の体温は世界中みんな同じであることが示すように、中身はほとんど変わらない。

ところが極端なステレオタイプは、人を記号にしてしまう。喜びや悲しみや苦しみという感情を自分と同じように持つ存在としてではなく、ひとつの括りにしてしまう。かつてメディアが今のよう発達していなかったころ、そんなステレオタイプが

世界を覆っていた。だから植民地主義があった。だから奴隷制度があった。だから戦争があった。だから虐殺があった。

①メディアが発達すれば、そんなステレオタイプは消えてしまうはずだと昔の人は思っていた。メディアがこの世界から、戦争や虐殺や飢餓をなくすはずだと信じていた。

確かにメディアは急速に進化した。僕たちは自分の部屋から一歩も出ることなく、世界のいろんなことを知ることができるようになった。でもここに考え違いがあった。メディアの量はかつてとは比べものにならないくらいに増えたけれど、それを受け取る人の時間は、一日二十四時間で昔と変わらない。だからメディアは、いろんな現象や事件を、効率のよい情報にまとめだした。つまり簡略化。この過程で、いろんな地域、国、組織に属する人たちが、またステレオタイプに押し込まれた。

これでは何も変わらない。いや変わらないどころか、情報をわかりやすく簡略化する競争に巻き込まれたメディアは、このステレオタイプを世界中に撒き散らす。

だから戦争はなくならなかった。新しい脅威としてテロも生まれた。不安と恐怖はメディアを通して世界中に広がった。

そんなメディアなどなくてもいい。メディアは水や空気のように、道路や橋のように、僕たちの生活にとって、なくてはならない存在になってしまった。今さら手放せない。

そして何よりも、ステレオタイプを壊してくれる可能性を持つのもメディアなのだ。人が憎み合い、傷つけ合うばかりのこの世界を、大きく変えてくれる可能性を持つのもメディアなのだ。

だからリテラシーは重要だ。正しくメディアを見たり聞いたリ読んだりすることは、この世界について、正しく思うことと同じ意味だ。そのうえで考える。自分は何をしたいのか。世界はどうあるべきなのか。何が正しいのか。何が間違っているのか。

僕たちがリテラシーを身につければ、きっとメディアも変わる。変わったメディアによって、僕たちはもっと変わる。そうすればきっと、世界は今よりはいい方向に進む。

（森達也「世界を信じるためのメソッド」による

問題のために一部改変しています）

〈言葉の説明〉

ステレオタイプ：「型」や「類型」。実際にはとてもいろんな要素があるのに、いちばんイメージしやすい要素だけが標準であるかのように錯覚され、やがてそれがすべてであるかのように思い込まれてしまうこと」と筆者が述べている。

文章B

次の文章は、『嘘吹きネットワーク』という小説の一部で、小学六年生の八吹錯と、同じクラスで学級委員の小野寺理子が会話をしている場面です。六年一組では、ネットで「学校でカワウソを飼っている」など嘘の書き込みがあったり、クラスメートの山瀬のカバンに妹のオムツが入っていた写真が出回ったことで「山瀬はオムツをはいている」といううわさが広まったりして、問題になっていました。

「だいたいさ、理子。ちょっと一回、落ちついて考えてみなよ。なんで嘘をついちゃいけないの？」

ふと、錯に話の根本をつかれて、理子は動揺する。

理子は、反射的に答えた。

「だ、だから、山瀬くんみたいに嘘のせいで傷つく人がいるし、あと、そう、詐欺とか！そういう犯罪でこまる人がいるじゃない。この間だって、ある女の子が、ネットで同い年の女の子と知り合って仲よくなつて、実際に会うことになったけど、実は相手はこわい犯罪者の男の人で、誘拐されそうになったっていう事件があったって、学校に来てくれたメディアリテラシーの特別講師の先生が言ってたんだから」

理子の言葉に、錯のまゆげがぴくりと動く。

「……メディアリテラシー？」

理子は、錯のその初めての反応に小さな優越感ゆうえっかんをおぼえ、ほころびそうになった口もとをきゅつと引きしめると、ここぞばかりにたたみかけた。

「そ。メディアっていうのは、テレビとか新聞とか本とかSNSとか、私たちが情報を得るのに使うものの中で、リテラシーは、元々は『読み書き能力』のことを意味する言葉だったけど、最近『特定の知識を活用する能力』って意味で使われている言葉。つまりメディアリテラシーっていうのは、情報をきちんと理解する力ってこと」

そう言って理子は、得意げに受け売りの知識を披露ひろうする。しかし錯は、理子のその教科書を丸暗記したかのような説明が気に食わなかったのか、なにやら苦い顔をしていた。それで理子は、あわてて言葉のギアを上げる。

「……っていうこととかを教えてくれる特別授業が、この間、うちの学校であつたの。今、世界中でフェイクニュースっていう嘘の情報がまきちらされていることが問題になって、ネットは嘘であふれているから、ひとりひとりが気をつけなきゃいけないって、その先生、言ってた。で、嘘にだまされないためには、私たちがみたいに小学生の時からメディアリテラシーの教育をきちんと受けて、情報が嘘か本当か、自分で見ぬける力を身につけなきゃならな

いんだって。……そう、だから私たちがメディアリテラシーを使えるようになったら、あんたが作ってる嘘なんて、もう誰もだまされないんだからね！」

説明している間に理子の言葉は加速して、その中で②「メディアリテラシー」は、どんな悪人にも負けない魔法まほうの言葉になっていく。その口ざわりのよさに、理子は酔よった。しかし、錯の方には言えば、そんな理子をあわれおように見て、言う。

「理子は、それでいいわけ？」

どこか引いているような錯の表情にいらつきながら、理子は眉まゆをひそめる。

「あたりまえでしょ。なにが悪いのよ」

錯は、再びため息をついた。今度は、長い長いため息だった。

「俺おれ、メディアリテラシーって言葉、嫌いなんだよね。っていうか嫌気いやけがさしてる。別にそれ自体が悪いわけじゃないけど、大人が俺らにそれを押しつけてくるたびに、なんか冷める」

「……なんでよ？ただの反抗期はんこうきじゃないの、それ？ださ」

「や、反抗期とか、そんな俺の感情の時代の名前はなんでもいいんだけどさ、理子はなんで、メディアリテラシーなんてもんが、この世に必要なんだと思う？」

と、逆に問いかけた。

(久米^{くめ} 絵美里「嘘吹きネットワーク」による
問題のために一部改変しています)

〔問題1〕

文章Aに①「メディアが発達すれば、そんなステレオタイプは消えてしまうはずだと昔の人は思っていた。」とありますが、なぜ「昔の人」は「メディアが発達」すると「ステレオタイプは消えてしまうはずだ」と考えたのですか。**文章A**の内容をふまえて、四十五字以上六十字以内で説明しましょう。

〔問題2〕

文章Bに②『メディアリテラシー』は、どんな悪人にも負けない魔法の言葉になっていく」とは、どういうことですか。**文章B**の内容をふまえて、七十字以上八十字以内で説明しましょう。

〔問題3〕

二つの文章を読んで、メディアリテラシーの必要性について、あなたの体験をふまえながら四百字以上五百字以内で自分の考えをまとめましょう。第一段落には、「メディアリテラシーの必要性」について書きましょう。第二段落よりあとには、そのことについてのあなたの体験と考えを書きましょう。ただし、次の(書き方のきまり)にしたがいましょう。

(書き方のきまり)

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話などを入れる場合は、行をかえません。
- 「や。や」などはそれぞれ一ますに書きます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます(ますめの下に書いてもかまいません)。

- 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合。」で一字と数えます。
 - 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
 - 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。
 - 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直します。
-